

土佐光起落款・印章 補遺改訂

知念 理

特別陳列「土佐光起生誕400年 近世やまと絵の開花―和のエレガンス―」(平成二十九年九月二日〜十月一日)の開催にあわせて図録(以下、展覧会図録という)を作成した。その「解題」で述べたように、土佐光起の落款は、①無官位落款(承応三年・一六五四)〜②將監落款(承応三〜延宝九年・一六五四〜一六八一)、③

入道常昭落款(延宝九〜元禄四年・一六八一〜一六九二)、④法眼常昭落款(貞享二〜元禄四年・一六八五〜一六九二)の四期に分けられる。これらを使用印との組合せにより試行的にA〜Gの八タイプに整理、分類して「光起落款・印章」を示し、展覧会出品作品から二十七点の落款・印章画像(光成、光祐作品含む)を付した。

小稿は、展覧会図録作成時には含み込めなかった分類タイプや画像について、展覧会後、近時までの新たな調査データもふまえてつづ補遺し、「解題」に載せた「(表2)光起落款・印章」の改訂を行うものである。使用例として十分な実作例数を検出できていない印章もまだあるものの、大方の一覧をえてご教示を仰ぐこととしたい。併せて光成、光祐作品の落款・印章画像についても追加し、江戸時代前期土佐派三代の落款・印章の整理を少しでも前進させておきたいと考える。

作品調査、画像掲載のご許可をいただいたご所蔵者各位に感謝申し上げます。以下、本稿による各補遺事項について簡単なメモを記す。

《光起関係》

補遺【1】「花鳥図」(堺市博物館)

同種落款は最多数作例を数えるなか、力強い筆勢を有する最上質の落款に属するが、展覧会図録では未掲載であった。

補遺【2】「水辺白菊図」(三井記念美術館)

「須磨・明石図屏風」(出光美術館)ではこの両印が捺される位置が上下逆転し、下方の印には落款がかからない。

補遺【3】「三十六歌仙扇面画帖」

人物表現がやや淡白で、將監叙任からまだ浅い時期の作か。同印章を有する作例に「草紙洗小町図」がある。

補遺【4】「桜花瀑布図」

この「土佐」白文方印を捺す実作例は現状では極めて稀だが、光起墨画様式の範疇で理解したい作例である。

補遺【5】「朝儀図屏風」(茶道資料館)

光起落款・印章 補遺改訂

<p>A</p> <p>「土佐(印)図」または「土佐(印)筆」</p> <p>「土光起」(六角香几形印)</p> <p>「普化禅師図」(本展No.6)</p> <p>「椿に鳥図」(本展No.7)</p> <p>「唐渡天神図」(「国華」三九〇号)</p> <p>「水墨山水図」(「国華」九一一号)</p>	<p>B</p> <p>「土佐左近衛將監光起筆」</p> <p>「藤原」(朱文方印)</p> <p>「土光起之印」(白文方印)</p> <p>「土光起」(六角香几形印)</p> <p>「春秋花鳥図屏風」(颯川美術館、本展No.1)</p> <p>「源氏物語図屏風」(福岡市美術館)</p> <p>「柿本人麿像」(本展No.33)</p> <p>「徒然草絵巻」(本展No.49)</p> <p>「千利休像」(「国華」一三三六号)</p>	<p>B'</p> <p>「土佐左近衛將監藤原光起図」</p> <p>「土佐左近衛將監光起図」</p> <p>「土光起」(六角香几形印)</p> <p>「伊勢物語図屏風」(本展No.53)</p>	<p>C</p> <p>「土佐左近衛將監光起筆」、または「土佐左近衛將監光起図之」</p> <p>「土光起之印」(白文方印)</p> <p>「將監」(朱文小方印)</p> <p>★作例多数</p> <p>補遺【1】「花鳥図」(堺市博物館・本展No.12)</p> <p>「春秋草花図」(下絵三十六歌仙図色紙貼交屏風)</p> <p>(斎宮歴史博物館・本展No.31)</p> <p>補遺【2】「林和靖梅鶴図」(大和文華館)</p> <p>補遺【3】「水辺白菊図」(三井記念美術館)</p> <p>補遺【4】「三十六歌仙扇面画帖」</p> <p>「桜花瀑布図」</p>	<p>D</p> <p>「土佐將監光起筆」</p> <p>「藤原」(朱文方印)</p> <p>「土光起之印」(白文方印)</p> <p>「土光起」(六角香几形印)</p> <p>補遺【5】「朝儀図屏風」(茶道資料館)</p> <p>「粟穂鶉図屏風」</p> <p>「桜花図屏風」</p> <p>(ジョン・C・ウエーバーコレクション)</p> <p>補遺【6】「芙蓉図」(大阪市立美術館、本展No.8)</p> <p>「三十六歌仙画帖」(島田美術館)</p>	<p>E</p> <p>「土佐將監筆」</p> <p>「土光起之印」(白文方印)</p> <p>「土佐左近衛將監入道常昭筆」</p> <p>「土佐常昭」(白文方印)</p> <p>「徹島・松島図屏風」(徳川美術館)</p>	<p>F</p> <p>「土佐常昭」(白文方印)</p> <p>「布袋・松に鶴・菊に鶉図」(本展No.3)</p> <p>「狩獵図巻」(本展No.10)</p> <p>★作例多数</p> <p>補遺【7】「柿本人麿図」</p> <p>「大寺縁起」(開口神社・本展No.9)</p>	<p>G</p> <p>「土佐眼常昭筆」</p> <p>「藤原」(朱文方印)</p> <p>「土光起之印」(白文方印)</p> <p>「署名なし」</p> <p>補遺【8】「三十六歌仙画帖」(東京藝術大学大学美術館)</p>	<p>H</p> <p>「署名なし」</p> <p>補遺【8】「三十六歌仙画帖」(東京藝術大学大学美術館)</p>
---	---	--	---	--	---	--	--	---

禁裏筋からの特注品を想像させる特殊な画題で、謹直な作画態度を示す品格ある屏風だが伝来は不詳である。

補遺【6】「三十六歌仙画帖」(島田美術館)

作例名のみ補遺。「中務」に落款・印章(補遺【8】東京藝大本と同印)。12×11cmと極小画面の画帖である。

補遺【7】「柿本人麿図」

七十五歳(没年)行年書きでは四例目。他三作例は展覧会図録「(表1)土佐光起年譜(未定稿)」を参照。

補遺【8】「三十六歌仙画帖」

彩色、描線の精度は高く、冴えた画技をみせる。新三十六歌仙を中心とするが全体の歌人選択の趣向は不詳。

《光成・光祐関係》

補遺【9】「松鶴図」

無官位落款の若描きとみられ、印章は『古画備考』に載る。

補遺【10】「七夕図」(敦賀市立博物館)

延宝九(元禄九年)の官位を署す。同印影で白文方印もある。

補遺【11】「観梅図」(「余所にては」貫之歌意図・鳥取県立博物館)

展覧会図録で「正六位印」と読んだが、印影鮮明でも難解。

補遺【12】「西王母図」(三幅対のうち・敦賀市立博物館)

展覧会図録に掲載した二印とは異なる「光高」の白文方印。

補遺【13】「新六歌仙色紙貼交屏風」

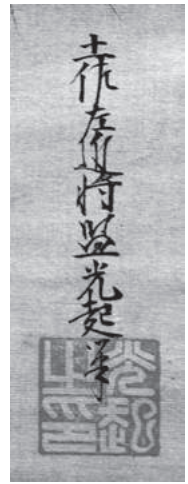
各図に「光祐」朱文方印、定家色紙に光貞の紙中極めがある。

補遺【14】「水辺鶉図」(源俊賴歌意図)

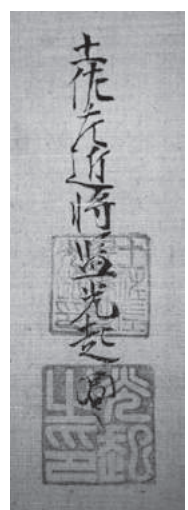
「光祐」落款による作例は珍しい。「藤原」朱文方印。

(ちねんさとる／主任学芸員)

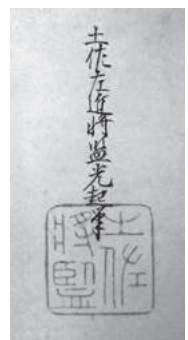
補遺【1】花鳥図(左幅)



補遺【2】水辺白菊図



補遺【3】三十六歌仙扇面画帖(柿本人麿)



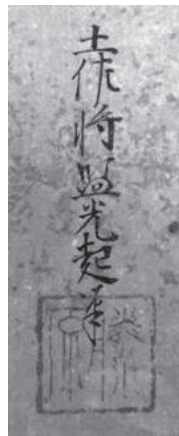
補遺【8】三十六歌仙画帖



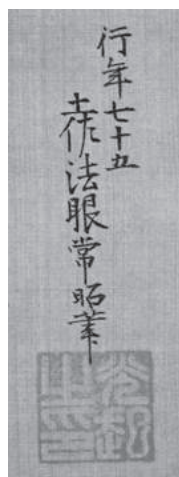
補遺【4】桜花瀑布図



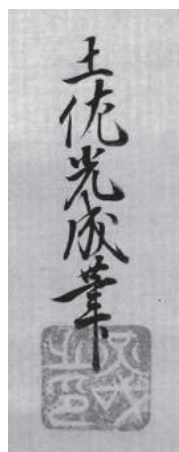
補遺【5】朝儀図屏風(右隻)



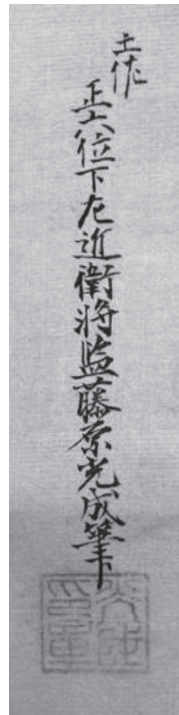
補遺【7】柿本人麿図



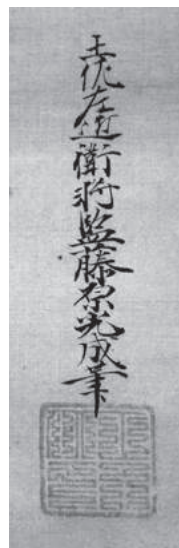
補遺【9】松鶴図



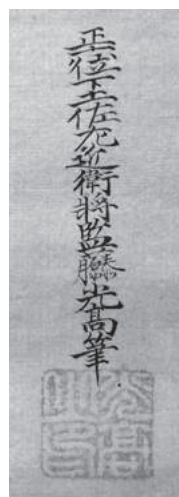
補遺【10】七夕図



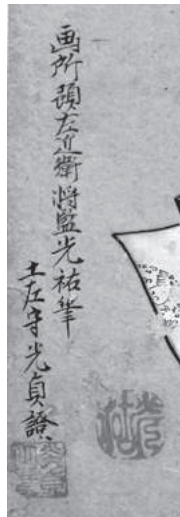
補遺【11】観梅図



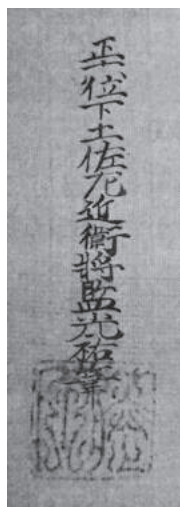
補遺【12】西王母図



補遺【13】新六歌仙色紙貼交屏風



補遺【14】水辺鶉図(源俊賴歌意図)



補遺【3】三十六歌仙扇面画帖(柿本人麿)



補遺【14】水辺鶉図(源俊賴歌意図)



補遺【4】桜花瀑布図



補遺【7】柿本人麿図



補遺【9】松鶴図

